

源である水は、その奥からあふれてきている。

洞窟までは二日もあればたどりつけるはずだったが、何があるかわからないので、食料は多めに持つことにした。

コヌンは自分の弓矢を持ち、アリュューシャは母親の石のナイフを借りた。それから一つずつ、忌み人からもらった袋を肩から下げた。

アリュューシャは、川の水を飲まないように、残る子どもたちにつく言い渡した。だが、その必要はなかった。すでに川の水はうっすらと濁り、悪臭を放ち始めていたからだ。やはり川が原因だったのだ。忌み人の言っていたことは正しかった。それなら毒消しが作れるというのも、嘘ではないかもしれない。二人は希望がわいてきた。

アリュューシャは、長の娘メヤに、みんなのことを頼んだ。「早ければ四日で戻ってくるから。みんなをお願いね。川には近づかないで。水は、湧き水を使うの。病人にはできるだけ水をたくさん飲ませてね」

メヤはうなずいた。まだ十一歳だが、父親ゆずりのしっかり者だ。

「わかった。こっちは心配しないで。あなたたちの家族の看病も、ちゃんとするから」

「ありがとう」

「頼んだよ、メヤ」

泣き出しそうな幼い子どもたちを残し、二人は旅立った。

川にそって、上流へと向かう途中、とちの実やブナの実、どんぐりなどの木の実が、手つかずのまま残っている林をいくつも見かけた。コヌンは、鈴なりのブナの実をうらめしげに見やった。

「本当なら、今頃はみんなでこの辺りに来てさ、木の実集めをしているはずなのに。こんなにたくさん実っているのに、そのままにしておくしかないなんて。悔しいなあ」

「本当にね」

だが、どんなにおいしそうな木の実やキノコを見つけても、二人は足を止めるわけにはいかなかった。一刻も早く、毒消しを手に入れなければならぬのだから。

それに、森の中は危険に満ちている。

一番怖いのは山犬だ。匂いを嗅ぎつけられでもしたら大変なので、二人は履物の裏に臭いクズリの脂をぬった。クズリは凶暴な上に肉まで臭くて、どんなに腹をすかせた山犬でも食べようとはしないからだ。

山犬、特に赤い山犬どもが近づいてこないことを祈りながら、二人は川沿いを進んでいった。上流に進めば進むほど、川の水は青黒く濁り、たちのぼる悪臭も、いっそうきついものとなってきた。水面にはたくさん魚や沢ガニが白い腹を浮かせており、次々と流されていく。

それを横目で見ながら、コヌンもアリュューシャも同じことを思っていた。